

中島重と「学生キリスト教運動（SCM）」（2）

倉橋克人

目次

はじめに

- 一 学生運動の高揚と同志社
 - 二 全国基督教学生討論会の開催
 - 三 エルサレム宣教会議とイエス伝研究運動（以上、前号）
 - 四 学生キリスト教運動の高まり
 - 五 中島の神学的主張をめぐって
 - 六 運動の先鋭化と瓦解
- むすびにかえて（以上、本号）

四 学生キリスト教運動の高まり

前節でたどったような学生キリスト者たちの意識の変化と高揚を受けて、一九二九年七月一日に開催された日本基督教青年会同盟（以下、時に「同盟」と略す）の第一二回総会では、同盟の機構の中に、新たに「思想問題研究の機関」を設けることが承認されて、藤田逸男を中心とした思想問題調査委員会が特設されることになった。⁽⁵⁷⁾ さらに同月一日にもたれた第二七回同盟委員会において、「本会は、キリスト者学生が今日の思想問題に対し何らかの活動をなさんとする事に対し、賛成の意を表し、且つ大いにこれが達成に努力せんことを希望する」との決議がなされるに及んで、それまで以上の学生たちによる自主的な実践性を帯びた運動が活性化することになった。そしてこの年の一月二六日の第二三六回常務委員会の議決を経て、水崎基一、堀豊太郎、菅円吉、杉山謙治、藤田逸男の五名が学生運動委員に委嘱されて、当面の間は、この学生運動委員会を中心にした組織的な研究会活動がスタートすることになって、これ以降、この研究会を軸にした運動が推進されてゆくことになったのであるが、今後の活動目標として、左記の一一項目に及ぶ「態度」が掲げられている。

一、研究会は現代を救済指導すべき新キリスト教とその社会哲学とを研究樹立してキリスト教諸運動の指導方針を確立せんとする。

二、新キリスト教の樹立はキリスト教新教の提唱であり合理的宗教革新運動である。

三、社会哲学の樹立は、現代に対するキリスト教の対社会運動の指針であり、社会的使命の確立である。

四、結局はイエスの精神に基調して現代社会を批判し、彼の精神を現代に生かさん為の聖戦の前衛運動である。ま

た新しき分野の開拓事業である。

五、従つて研究会は建設運動であり、社会の進化を信じ将来に希望を有するものである。

六、研究会は聖書研究会のみに非ず。宗教と科学との真の提携に依つて大衆の蒙を啓き、誤れる宗教の独断を排し、社会科学の横暴を排撃し人類の真の解放と成長に資せんとす。

七、研究会は唯物思想より青年の靈魂を奪い返し彼らに靈の故郷を指示する。

八、精神科学の真理を高揚して唯物思想の独断に対し啓蒙運動たるものである。

九、研究会は真剣真摯なる同志を要求する。真に現代を憂えキリスト教に生き社会を救済せん為め、その根源より出発せんとする同志の運動としてこそ研究の理由は有る。従つて数を期待せぬ、聖別を期待す。

一〇、研究会は他の非難攻撃を恐れぬ。生けるイエスに従わんとするものであれば。

一一、研究会は基督教青年会の自己革新的使命に立つ。⁽³⁸⁾

文面における観念的な性格は否むべくもない。だが、それでも彼らのキリスト者の社会実践をめぐる鋭利な気概には、純然たるものを感じさせる。彼らは一方で、唯物論的階級闘争を斥けつつも、自らのキリスト者としての思想的立場のありようを根本から変革させる必要を覚えていた。それとともに彼らは、従来とは異なつた日本のキリスト教の新たな社会的使命と宣教の方向性を模索し、展望していたのであつて、そうした「態度」こそが、他ならぬイエスの精神に信従することであると考へていたのであり、言うなれば、「イエス・ルネッサンス」とも呼ばれるものであつた。そのことは、翌一九三〇年七月二一日より御殿場東山荘で、全国から一四〇余名の参加者が集まつて開催された第四〇回夏季学校の標語が「イエスを現代に生かせ」であつたことにも表われている。この夏季学校では、同盟の委

員長の井深梶之助はじめ、菅田吉（「基督教の本質」、藤田逸男（「キリスト者学生運動の使命」、杉山謙治（「左翼学生運動の陣営」、そして中島による講演（「基督教と現代社会」）が行なわれている。

この講演の中で中島は、「古いキリスト教に固守する事なくしてキリスト教の立場を転換することは大問題である。これを度外視しては自分の立場はあり得ない」と述べて、次のように主張している。

今までは個人が個人主義的に救はれたのであるが、今や社会主義的な救の宗教が要求されてゐる。我々の仕事としては個人主義的なキリスト教にとちこもつて社会の動きも知らずしてマルキシズムに圧迫されて小さくなることなく、キリスト教の社会的使命を正しく把握しなければならぬ。しかして新しい意味の伝道を起せ。小さいつまらない運動をこせこせするな。我々は今こそはつきりとキリスト教の社会的使命を認識せねばならぬ。与へられた問題はその実現と実践である。⁽³⁹⁾

さらに彼は、キリスト教と社会問題との関係についても触れて、キリスト教が社会に生起しているさまざまな問題と関わってゆくには、「キリスト教側の自己批判から始まらねばならぬ」と述べて、「現代のキリスト教の宗教改革はなされし後、信仰の変換がなされし後に社会問題の批判がなし得るのである」と主張して、キリスト者が社会問題と向き合う場合には、少なくとも「一、社会に対する認識」、「二、問題の掴み方―社会問題とは何か」、「三、理想社会形態―キリスト教的」、「四、実現の方法―キリスト教の実現不法」の四つの側面から検討される必要があるとして、キリスト者の社会認識は「何処までも真理を真理とし、事実を事実としなければならぬ。キリスト教のドグマを入れてはならぬ。そして事実を事実とする事がキリスト教の真理であると確信する」と述べている、その上で彼は、参加

している学生たちに向かって、次のように鼓舞するのであった。

諸君！ キリスト教社会観を樹立するに對して我々はキリスト教のドグマに迎合してはならない。事實は事實である、真理は真理であるといふのがキリスト教の正しい立場である。我々は科学として社会科学を正しく認識しなければならぬ、而してキリスト教の立場より如何にこれを実践すべきかは我々の課題である。(中略) 今までは個人が個人主義的に救はれたのであるが、今や社会主義的な救の宗教が要求されてゐる。我々の仕事としては個人主義的なキリスト教にとちこもつて社会の動きも知らずしてマルキシズムに圧迫されて小さくなることなく、キリスト教の社会的使命を正しく把握しなければならぬ。(中略) 我々は今こそはつきりとキリスト教の社会的使命を認識しなければならぬ。与えられた問題はその実現と実践である。⁽⁶⁰⁾

この夏季学校では、一週間にも及ぶ参加者たちの討論が重ねられたが、日程の最終日の二八日の閉会式において、左記に引用する「研究会設置に関する声明書」が採択された。

今や我々同志基督教青年会第四十回夏季学校を散ずるに当り、我等は此処に宣言を發して全日本基督教者学生及び青年諸君の前に大胆に呼びかける事を我等の義務であると信ずる。一八九〇年、初めて夏季学校が当時の進歩的基督教者学生に依つて開校され、爾來我等の運動は幾多の曲折を経、仮令自らの使命を学生の個人的救済に置いたとは云へ、仮令自らの使命を所謂福音主義に規定したとは云へ、常に時代の尖端に立つて基督教の伝道、学生青年の救済の為に闘ひ、幾多の輝ける先輩を社会に送り出した。(中略) 今や国内経済組織の行き詰りは必然的に資本家対労働者、地

主対農民、階級対階級の幾多の困難なる問題を展開し、百万を越ゆる失業者群を街頭に投げ出し、学生層に於ける就職難及び其の他多くの問題と共に逼迫せる社会情勢を現出するに至つた。(中略)従つて我等基督者学生青年は従來の個人主義的基督教イデオロギーを以つてしては、到底此の難局に処する事の不可能なる事を確信するに至つた。依つて我等は観念的救済にあらざ、新しき基督教的立場に立つて、身を以つて此の難局に当らん事を誓ふ(後略)(傍点引用者)。(61)

このような学生たちの意識の高揚に呼応するかのようになり、同盟の機関誌『開拓者』も、この夏季学校が開催された同月号を「転向特輯号」として発行して(特集は「社会と経済と基督教」、これを一般書店でも販売する方針を打ち出した。さらに一〇月一七日から一九日に東京の日比谷公会堂で開催された同盟の創立五〇周年記念大会では、「青年会を現代に生かせ」の標語のもとで全国各地の都市YMCAの代表一八五名と学生YMCA代表一〇八名、実務関係者一二名の、総勢三二〇名が集まつて、白熱した議論が交わされた。第一日目の分科協議会では、「我等の指導精神としての基督教」の主題で桑田秀延、菅田吉、松岡駒吉の三名による講演が行なわれて、分科会では「基督教青年各部と思想問題」をはじめ、「労資問題」、「消費組合問題」、「教育問題」などのテーマで活発な協議がなされて、(62)「個人的キリスト教か社会的基督教か」、「キリスト教は階級的に如何なる立場をとる可きか」、「キリスト教の現代に於ける社会的信条如何」などの論点で議論が交わされた。菅は講演の中で(「基督教の転向とその原理」、「現代は何処を見ても、個人を改造することによつて社会を改造する事よりも、むしろ社会を改造する事によつて個人を改造する事を高潮すべき時」であると訴えている。

続く第二日目には、「基督教青年会の現代に対する使命」の主題のもとで、田川大吉郎(東京YMCA幹事)、奥村

竜三(神戸YMCA総主事)、そして賀川豊彦の講演が行なわれた。この時、賀川は、それまでの同盟の組織のあり方に対して、次のように抜本的な意識の変革を迫っている。

(前略)キリストは神の意志を明白に把持し、人類を救はんとする意志を以て一生を歩んだ。彼は実に大工であった。そして、人類の解放のために血みどろになつて戦つた。私は共產主義者がマルクス旗の下にと叫ぶやうに、無産者イエスの旗の下にと叫ぶ。新約聖書には、完全なる無産者の福音がある。YMCAは、このキリストの精神に基礎をおく。青年のグループ・コンシヤスと宗教的社會意識とキリストの精神を中心として立つ団体である。(中略)尖端の第一線を守るべき責任をもつている。前衛として立たなければならぬのだ。果して、然らば現在の日本におけるYMCAは前衛を死守しているか?(傍点引用者)⁽⁶³⁾

こうした賀川の訴えに触発されてか、分科協議会では参加者の中から「今日のYMCAがやつてゐることは誠に数多いが、大抵は微力なことに終つてゐる。ゆえに今後の新しい事業はYMCA内に限ることなく、更に外部に向かつて進出し、社会的活動をしなければならない」といった意見も提起されるに及んで、もはや同盟の現状を打破しようとする変革の気運は抑えられないものになつていったのであつた。⁽⁶⁴⁾

五 中島の神学的主張をめぐって

それでは中島は、このような学生キリスト者たちの意識の高まりの中で、どのようなことを主張していたのであるか。⁽⁶⁶⁾

時期的に前後するが、中島は、学生キリスト教運動が高揚していった一九二九年から翌三〇年にかけて、『同志社新聞』をはじめ、『大阪毎日新聞』や『読売新聞』などの一般紙にも、精力的に論文を寄せている。そして、それらの文章をまとめて、三〇年五月に『マルキシズムに対する宗教の立場』（新生堂）を上梓している。同書の中で彼は、次のような時代認識を提示している。

資本主義が段々進展して高度化し行く。産業は組織化せられた上に組織化せられて株式会社の上にカルテルやトラストが出来る。自由競争は段々独占へと変つて行く。現代に於ける資本家階級とは、資本の私有に依る権力階級を意味する。内は被雇傭者たる労働階級を搾取し、外は顧客たる消費者を搾取する所の権力的搾取階級である。之に対して又無産民衆の覚醒勃興は日に目に見えざるうちに潮の満ち来るが如くに進展しつゝある。政治闘争に経済闘争に無産階級の雄叫の聲が聞える。社会は根底から揺り動かされんとして居る、誠に現代は三百年に一度か五百年に一度しか遭遇せざる、人類社会の一大変転期である。⁽⁶⁷⁾

では、このような「人類の一大変転期」の渦中において、キリスト教はどのような態度を取りうるのでしょうか。中島はそれを、「(一) 資本主義を弁護して新興階級の運動を抑圧すること」、「(二) 全然超然主義を採りて顧みざる

こと」、「(三) 資本階級と無産階級との両者に対して是々非々主義の態度を採ること」、「(四) 無産階級の解放運動を助ける態度を採ること」の四つの態度に分類して、第一の態度については「基督教の精神に合せざるは殆ど贅言を費す必要の無いほど明らかである。(中略) 斯の如きは名目上基督教徒であつても、ホントはキリストを売つて十字架につけて居る人である」と斥けている。また、第二の「超然主義」も、第三の「是々非々主義」についても、前者は「社会の動きが如何であらうと基督教は靈的救済を問題として居るのであるが故に相関する所は無い」といった立場であり、後者は、一面では「社会の出来事に全く無関心といふのではなく、時々批評する態度を採つて、資本家階級に批難すべき点があれば批難し、又賞むべき点があれば賞めると同時に、無産階級に責むべき所あれば責め、又賞むべき点があれば賞めるといふ態度」であつて、いずれも資本主義制度の根本に対しては沈黙していることにおいては同じであると批判している。けれどもキリスト者は、こうした問題に対して沈黙の態度を取る続けることは許されないとして、彼は次のように主張する。

(前略) 沈黙は常に現状の是認ではあるまいか。現在の状態に悪を認むるものは常に声を大にして之を批難し、之に挑戦せねばならぬのではあるまいか。之を若し黙過して居るとせば仮令内心如何あらうとも、事実には於てはその悪の弁護者となつて居ることになるのではあるまいか。(中略) 若し此資本主義といふ悪に対して超然主義の態度を採り、又は是々非々主義の態度を採らんとする基督者あるならば、そは明に無意識的に資本主義の弁護者となり、その宗教的番人となり、無産階級の解放運動の妨害者阻圧者となつて居るのである。⁽⁸⁾

こうして中島は、「吾人は基督者の態度としては資本主義を否定し之に挑戦して、無産階級の解放運動を助成する

態度を採る外無いと思ふ」と明言して、それこそがイエス・キリストの精神を現世において実行し、「神の国」を實現する一歩であるというのであった。

しかしながら、ここに一つの問題が生じることになる。それは、マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で分析したように、「プロテスタンチズム」と資本主義との間には切つても切れぬ歴史的因縁が存在」していることである。その「歴史的因縁」に対する「自己反省」と「自己清算」がなければ、プロテスタント・キリスト教は資本主義に対して「宣戦布告」をすることなどではできないのではなからうか。中島は、この点にこそ「最も深刻なる信仰上の問題」があるとして、そこに「宗教批判」の課題と意義を見出し、マルクス主義の「宗教批判」の動きにも敏感に反応している。しかし、彼の立場は、「マルキシズムに対する宗教の立場は宗教改革……第二の宗教改革を以て答へる外無い」との姿勢に貫かれたものであつて、それは、「宗教は否定すべきものでもなく、又否定され得るものでもない。要は宗教をして本来の役目を為さしむるに在る、その社会機能を十分尽さしむるに在る」といった彼の信念に基づくものであった。⁽⁶⁹⁾

それならば中島は、宗教者の立場から、どのようにマルクス主義に対抗しようとするのであろうか。彼は「宗教が社会的宗教となつた上に於て初めてマルキシズムに対して何事かを言ふことが出来る」として、「今日マルキシズムと呼ばれて居るものはずべてのマルキシズムではなくて、特にロシアの共産主義に發展した所のもののみを指して」いるようであり、それもかなり「狂信的でドグマチック」であると批判している。そして、このような要素は、「集団的実行的要求から来て居る」のであるから、自分たちの側としても、一面で実行的な批判が行なわれなければならぬと述べている、言い換えれば、マルクス主義に対抗するには、「宗教の立場からの有力な社会運動」が起こらなければならぬというのである。

もとより、中島はマルクス主義の革命論には同調しない。彼は、ロシア革命が起こった必然性については認めているが、「革命に依りて政權を掌握した所で資本主義の發達が或程度迄高度化して居なければ到底之を社会主義社会へと転向することの出来るものではない」と主張して、日本では既に普通選挙制度も行なわれて、「国家のデモクラシーが進んでいて、合法手段で進み得る可能性が与えられており、無産政党は国民の多数の支持を受ければ内閣を組織することができるとして、「日本は露西亜と同じ徑路を進むべきではなく、西欧諸国の徑路殊に英国の先蹤等により多く学ぶべきである」と述べている。^⑩

では、中島は、どのような社会運動に展望を見出しているのであろうか。彼は、「革命といひ合法手段といひ何れにするも政治行動に依る方法は言はゞ社会組織の变革に対しては間接的作用しか及し得ず、言はゞ本隊の闘つて居るに対して援護射撃を為し得るに過ぎない」として、「社会組織の变革に直接關係あるは經濟行動に属する組合運動である」と述べて、「労働組合が発達して労働者の自治的協力的組織的訓練が出来て居なければ如何に無産政党が政權を掌握したからとて社会組織の变革といふ本質的なことに就ては何も出来るものではない」と主張している。そして、このような認識を示す中島は、自己が標榜している「社会的キリスト教」の実践的な課題を、次のように提示するのであった。

今、社会的宗教の立場に於て、此間に何を為し得べきかといふに、勿論政治運動としては合法運動である限り、無神論者とも結合して無産政党の發達を援けて議會を目がけて突進することが出来る。然しもつと根本的なことは、組合運動に対して直接間接に援助してその發達を助けることである。(中略) 無産者農民をして新社会の中心的要素たるの資格を得しむるは教育を措いて外に無い。而して更に教育の外に新社会の指導的精神となるべき社会的宗教を伝

道する。無産者農民をして新社会の中心的要素として真に利己心を否定して社会に奉獻し得る人格者たらしむるには宗教が無くてはならぬ。之を基督教では『神の国』運動と言つて居るのである。⁽⁷⁾

そうであるならば、中島が待望している「神の国」とは、どのような世界なのであろうか。この点について彼は、次のように説明している。

基督教は神に於て人類の連帯性を見出す所に基調を置かねばならぬ。此は兄弟主義の徹底である。今迄は神を理解するに自我を以てするに過ぎなかつた。今後は自我の複合的結体なる共同社会 *Gemeinschaft* を以てせねばならぬ。「神の国」の真意義を再発見して、教会よりも国家よりもっと大きくして深い全人類の共同社会に神の姿を実現する意味に解せねばならぬ。「神の国」の実現は十字架に依る贖罪愛である。贖罪愛は社会化愛と理解して之をコペルニカルの転向して、すべての信徒が之を実行するものとせねばならぬ。⁽⁸⁾

中島にとつての「理想宗教」とは、「人間の共同社会を成立せしめ、共同社会の結合を培養し育成する」ものであり、「共同社会の進化発展と、もに、臣下発展し、(中略)その時代の共同社会を最もよく育成するに足る宗教」であつたが、こうした彼の神学的な主張は、賀川豊彦の思想的な影響を深く受けたものであつた。彼は、この時期に賀川によつて全国的に展開されていた「神の国運動」についても触れて、「賀川氏に依りて多年提唱せられ來つた『神の国運動』が此頃漸く諸教派の間に認められて來て賀川氏を先頭に立てての諸教派連合の『神の国運動』となるに至つたことは近来の注目すべき現象である」と積極的に評価している。⁽⁹⁾そして、「神の国運動」の宣言の中の「身を以て社会問題

の解決に当らんとす」という文言をめぐって、「基督者の気概として頼もしい次第」との期待を寄せている。けれども中島には、当時の日本の教会には、「神の国運動」が目指している宣教の理念が、十分に理解されているように思われなかった。彼は、次のような疑義を呈している。曰く、「然乍ら私の第一に感じたことは『神の国』なるもの観念内容如何である。果して此宣言の示すが如き『神の国』がすべての教役者乃至信者に依りて信仰せられて居るであらうか。『神の国』といふ言葉は同一であつてもその意味する内容に多分の隔りがありはしないだろうか。『神の国』の真意義に徹せずして果してよく社会問題の解決に資することが出来るであらうか」と。⁷⁴

中島にとって「神の国」とは、中世のカトリック教会のように権力的組織をもつて地上に具現されるものではなかった。それは、「権力的組織を以て『神の国』とするは如何にその権力的組織が立派なものであらうとも、キリストの『神の国』の本義を遠ざかること大なるものがある」からである。ましてや、その権力の行使が搾取的であつたり、圧政的なものであればなおさらである。宗教改革が起こった歴史的な必然性も、この点にあつたのであつたのであり、その意味では、確かにプロテスタントの出現によって「イエスの宗教の自律的内面的の深さは取り環され『神の国』の個人の心霊の世界を外にして無ないことが明にせられた」のではあつたが、そのプロテスタンチズムも「あまりに個人主義自由主義時代の意識に依りて基督教を理解するに過ぎたるがために、宗教を自律的内面的に深めたるの大効ある代りに、之を甚だしく個人的」にしてしまった。その結果、「その内面主義は人をして、個人の内心の苦悩と十字架に依る解脱の問題にのみ沈潜せしめ、その良心至上主義は宗派を生むに宗派を以てし、相互の間の分立と葛藤とを終始せしめ、大きな社会を建設するの気概に乏しからしめて居る」と中島は批判している。その上で彼は、「神の国」の到来について、次のような新たな展望を示している。

人類は近代に至つて『社会』を発見した。社会は十八世紀の個人主義者が考へたやうに個々人の無機的機械的集合ではない。有機的（有機体といふに非ず）生命的結合体である。（中略）イエス・キリストは靈的直感を以て此人類の深い連帯性を洞察し把握し、此を神に迄深めて一身に体験せられ、『神の国』の福音として宣べられたものである。（中略）基督教が人と人との連帯性を神に於ける人類の同胞性として信仰し、人類の大共同社会の建設を『神の国』の実現として努力し、之が為め個々人の非社会的利己心（罪惡）を否定して神と『神の国』とに奉仕献身せしむる所にその永遠の真理があるのである。（中略）基督教は人類の社会連帯を神のうちに深め高める意味に於ての『神の国』の努力に依りて此社会進化を創造的社会進化として助長し促進することが出来る。此根本義に徹底してのみ基督教が『身を以て社会問題の解決に当る』ことが出来る。⁽²⁶⁾

このような中島の神学的な主張が、どの程度まで当時の学生キリスト者たちに理解され、受容されていたのかは、具体的には分からない。けれども、彼が書いた一連の文章が、各地方の教会の青年会でもテキストとして熱心に読まれていた経緯を考えると、⁽²⁶⁾少なくとも中島の主張は、それまでの日本の多くの教会で語られていたメッセージとは、神観においても、救済理解においてもまったく違ったものであつて、それまでの日本のキリスト教のありように対して不満と疑問を抱いていた青年たちにとっては、一つの指針の役割を果していたことは確かであろう。

六 運動の先鋭化と瓦解

その後、SCMは、同盟内の学生運動委員会を軸にして展開されていったが、翌三一年の二月に東山荘でもたれたSCM指導者懇談会には中島も出席して、「基督教と科学」と題する発題講演を行ない、同年七月二日から二八日に開催された同盟の第四一回夏季学校（主題は「基督教と社会危機」）でも彼は、「基督教は社会科学を如何に取り扱うべきか」と題する講演を行なって、学生キリスト教運動の理論的な指導者の一人になってゆくのであった。この夏季学校では、「SCMは宗教運動」であるといったテーゼが打ち出されて、一種のリバイバルが起こったという。

なお、この第四一回夏季学校に合わせて、七月二〇、二一日の両日には、第一回の基督者学生運動(SCM)大会も催されている。この大会は、夏季学校の開催を前にして、SCMの運動組織をより堅固なものにする目的で各研究会の代員が結集してもたれたものであったが、この時、日本SCM研究会の規約案が審議され、綱領の決議が行なわれた。さらに、夏季学校終了日の同月二七日には、メンバーたちは再び参集して、第二回大会を開いて、研究会の組織を同盟とは独立させることが決まった。とは言い、この日本SCM研究会の書記長には同盟の学生部主事の中原賢次が就いており、活動の実際については、同盟とは不離の關係が保たれていた。

だが、それではどうして、このような組織独立の問題が俄かに浮上したのであるうか。そこにはやはり、こうした青年たちの動きに対して、同盟の内部に懸念や警戒があったためではないかと思われる。たとえば、SCMの理論的指導者の一人であった菅岡吉は、前年の三〇年一月二九日から数回にわたって、「将来の宗教」と題する論説を『読売新聞』に連載して、「今までの新教は個人的、禁欲的宗教であつたが、今後の新教は社会的な新教でなければならぬ。宗教は単なる気分ではなく、生活である以上、現代に於ては、文明へ働きかける宗教、政治へ、経済へ、学問へ結び

つき、又それと提携する宗教が求められている。つまり基督教は社会化しなければならぬ」と主張し、これが相当の反響を呼び起し、これに対して、日本のキリスト教界の中には反対論を掲げる動きも起こっており、この時期に全国的に展開されていた賀川豊彦の「神の国運動」に対しても、教界内部では批判が少なくなかったことを考え合わせると、そこに通底している、キリスト教信仰を社会化しようとする動きに対して、これを抑止する勢力が顕在化していたのではないかと思われる。

このことは、翌三一年の六月三日に「神の国運動側」と「学生運動側」との間でもたれた「思想問題座談会」において、教会側がSCM側に対して、「教会内部」に起こっている運動についての懸念に対する釈明を求めていることによっても窺えよう。この座談会は、「神学上の問題とか、思想問題という広汎な抽象的な問題でなしに、青年会同盟の基督者学生運動の実際とその態度について懇談」することを目的にもたれたものであったが、「神の国運動」側は、赤沢元造、富田満、野口末彦、海老沢亮、塚原要の五名が参加し、SCM側からは藤田逸男、菅円吉、寛光顕等の八名が出席して、さらに有志として阿部義宗、都田恒太郎、ガントレット恒子などの六名が陪席して、席上、赤沢から同盟とSCMとの関係が問われたところ、藤田逸男は「同盟とSCMとは寧ろ別個のものであります。同盟は同盟委員会の決議に従つて事業を遂行してゐます」と返答している。そして、次のような意見の交換がなされている。

富田 これは聞いたことですが、昨夏の同盟の夏季学校では、今日の教会の中の最も進歩した処でさへも受け入れられないやうな神観を高調されたようですが、それがあな方の目的としない教会破壊の結果に立ち至ると御考へにありませんか。(中略)福音と云へば直ぐ否定する。神性の問題さへ否定するといふ態度では全く教会の立場と衝突する。

阿部 SCMに対しては内外共に無理解から誤解を起してゐることは事実です。又一方若い者は理想に走り過ぎて、

例へば教会経営の如き実際のなやり方に反対する。私の考へではSCMは左傾してゆく学生達をキリストの許へ引き上げる大きな役割を演じてゐると考える。だからSCMの事を一般に理解させるやうに力めてはどうか。

野口 今日迄の基督教の力は教会であつたし、将来に対しても教会の力、教会の価値といふものを認めて欲しい、勿論今日の教会は大いに批判されるべきであるし、又少々破壊されてもいゝと思ふ。而し其れは破壊のための破壊でなしに、全く建設的なものであつて欲しい。神学の問題であるが、此れは自由です。この一致といふ事は不可能である。これは全く自由で、個人的な問題として取扱ふべきものであらう。⁽⁸⁾

この座談会は、穏やかな空気のもとで進められたというが、しかし、こうした懇談会が、この時期に設定されなければならなかつた事情に、当時の日本のキリスト教界の内部に生まれて来たSCMに対する危惧が働いていたことは推測されよう。そして同盟の内部においても、次第にSCMに対する反感的な言動が、常務委員会の場でも公然化してゆくようになっていたのであつた。⁽⁹⁾

ところで、先述した同盟の第四一回夏季学校は、七月二日から二八日までの期間、御殿場東山荘で「イエスと偕に前進」の標語のもとで開催されたが、協議の主題は「基督教と社会的危機」と定められて、連日、招かれた講師による発題講演のもとで、一六一名の参加者たちは、熱心な討議を重ねた。その様子は、「異種の信仰リバイバル」すら呈していたといふ⁽¹⁰⁾。この時、講師として招かれた中島は「基督教は社会科学を如何に取扱う可きか」というテーマで講演を行ない、また彼は、この年の二月一三日より開かれた学生運動指導者懇談会にも招かれて「キリスト教と社会科学―マルクス主義と学生運動」との論題で講演をしてもおり、こうして彼は、木村米太郎(青山学院大学)、杉山謙治(早稲田大学)、今中次磨(九州帝国大学)、榊原巖(福島高商)らとともに、次第にSCMの理論的指導者と

しての役割を果たしてゆくことになった。

しかし、この時点におけるSCMの活動の拠点は、あくまでも在京であって、関西に活動の足場を置いていた中島としては、関西における活動の拠点を起こす必要を感じるようになった。そして、運動の全国的な展開とあいまって、京都、大阪にも各支部が結成されると、この年の八月二三日に彼は神戸雲内教会で、旧日本労働者ミツシヨンの関係者や、末包敏夫、岩間松太郎、田中左右吉、竹内愛二たちとともに社会的基督教徒関西連盟の創立準備総会を開いて、翌九月二四日には京都基督教青年会館で、会員五〇名を擁して、同連盟が結成の運びとなった。⁽⁸³⁾この時、左記の三ヶ条からなる綱領が定められている。起草したのは、中島であろう。

一、我等はイエスに従ひて神を人類の父と信じ、神の国実現を以つて基督教徒の根本的使命なりと信ず。

二、我等は神の国の実現はイエスの十字架に顕れたる贖罪愛の実践によりてのみ可能なりと信じ、自ら贖罪愛の生活者たらむことを期す。

三、我等はイエスの福音により神の国に適はしき人格を造り、且つ神の国理想に背反する一切の社会組織及び制度の根本的改革を図り、以て新しき共同社会の建設を期す。⁽⁸⁴⁾

中島と一緒に社会的基督教徒関西連盟を立ち上げた末包と田中は、先の同盟の夏季学校にも参加していたが、彼らは、参加した学生たちの真摯な態度にいたく感激して、「第四十一回基督教青年会夏季学校に出席せる我らは、諸君が真摯なる態度をもつて提唱しつつある基督者学生運動に対し満腔の賛意を表し、これが進展につきて伴う世の誤解を解き、進んで微力を致さんことを約す」との声明を、友井禎、高島政男、二宮秀雄、吉原貞子、R・L・ダーギン

らとともに発表し、中島も「SCMの発展は、今や社会的基督教の総論を完成しいよいよ各論にまで入りたる情勢にある」との感想を述べている。⁽⁸⁵⁾ こうしたことから、関西連盟が、こうした学生キリスト者の運動を支援し、思想的教化と宣伝を行なう目的で設立されたものであることが窺える。そして、こうした動きに呼応するかのようにして、翌一〇月二七日には在京においても、友井を中心にして、杉山謙治、木村米太郎、菅円吉たちによって東京社会的基督教研究会が誕生して、かくして東西両団体が提携して運動を推進してゆく態勢が整ったのであった。⁽⁸⁶⁾ これらの運動の論客たちは、主に同盟の機関誌である『開拓者』で論陣を張って、いわば「開拓者一派」をなした感すらあった。⁽⁸⁷⁾

だが、こうした親和的な関係も、次第に亀裂が生じてゆくことになった。SCMは、既述したように、同盟から独立した運動の組織になっていたが、そこには、運動の高揚を抑制しようとする同盟側の保身的な体質や、当時の日本のキリスト教界に対する学生側の反発が、急速に頭をもたげていた。

その一方で、学生たちの活動を取り締まる政府当局の動きも、俄かに厳しくなっていた。そうした中で、一九三一年一月二日に、いわゆる「京都事件」が起こった。この事件は、SCM京都支部のメンバーであった同志社大学学生の西川治郎(予科神学部生)が、自治会運動に関連して警察の家宅捜査を受けて拘引されたことが、同盟の中央執行委員会で取り上げられたことが発端となったものであったが、⁽⁸⁸⁾ 執行委員会は、このような問題の続発を制止しようと苦慮して、何とか組織的な分裂を避けようとしたが(SCMにおける「組織と個人」の問題)、⁽⁸⁹⁾ こうした動きに対して批判的な学生たちの中には、急速に階級闘争への参加を志向する者が台頭してくるようになっていった。⁽⁹⁰⁾ そのイデオログとなったのは、当時、同志社大学の神学生であり、同校のSCM支部に属していた清水義樹であった。彼は、ヘーゲルの歴史哲学の影響を受けて、神の働きを、人類の歴史の弁証法的な発展過程に内在するものとして捉えて、それは、プロレタリアートとブルジョアの階級闘争の中に顕現すると主張して、学生キリスト者の階級闘争への

参与を鼓吹したが、このような主張は、運動組織の上では同盟から分離していたものの、何らかの形で同盟との協調関係を保持しようとしていた S C M の幹部層に対する直接的な批判へとつながってゆき、S C M そのものが、内部分裂する事態を迎えることは避けられなくなった。

運動の内部変革を志向する学生たちのグループは、同年七月二一日から開催が予定されていた同盟の第四二回夏季学校に向けて、同月一七日に名古屋で対応を協議したが、結果としてこの夏季学校は、彼らの指揮によって紛糾して、日程の途中で、閉鎖解散のやむなきにまで追い込まれることになった。七月二六日付で閉校に当たって幹部側から発表された報告には、その時の会場内の喧騒とした様子が、次のように報告されている。

(前略) プログラムが日一日と進むに従つて極めて遺憾乍ら、来校者の一部とはいへ、徒に講演者及び指導者に対しては勿論、更に、基督者としての態度の、それと異なるものに対しては、凡ゆる機会と凡ゆる戦術を講じて、社会民主主義者、裏切者、ガラ幹等と悪罵誹謗し、極めて非基督者の態度を以て非難攻撃に終始したるのみか共同生活をなすための親切なる注意に対しては、之を不当なる弾圧と叫び、遂には「弾圧に抗し夏季学校に撤す！」と題して、「反動的夏季学校絶対反対!」「出席者の自由自治の獲得へ!」「形式的祈祷会絶対反対!」「スパイをたたき出せ!」或は、「夕陽会を俺達の手で守りぬけ!」更に、「暴圧をけつて出席者大会開催さる!」等のスローガンを掲げ、不穏なるピラ撒きをなすの狂態をさへ演ずるに至つた。(中略) 徒に、夏季学校の中に潜入して、茲を闘争場と心得、建設を忘れて攪乱、破壊に狂奔し、愈々無軌道的に盲進する人々とは到底、共に協力一致、神の前にひざまづき、我等の進むべき道を祈り求め、その所期の目的を達する能はざるを痛感し夏季学校責任者並に講師一同は熟議の結果、断然意を決して、予定の一日を残して、夏季学校を解散するに決した(後略)。(9)

こうした事態に対処するために、七月二八日のSCM大会において幹部派の人たちは、SCMの解散案を提出した。しかし、この動議は多数決で否決されて、寛光顕、杉山謙治、藤田逸男、佐藤健男、中原賢次、菅岡吉等は運動から脱退する旨の声明を發して、ついにSCMは分裂の事態を迎えることになってしまったのである。⁽⁹²⁾ この時の脱退声明文には、階級闘争を目的とした活動グループの学生たちに対する非難が顕わにされている。

(前略) 昨年来、我等の陣営内には、極めて一部分とは云へ、SCM本来の使命を無視し、現段階に於ては階級闘争への実践以外には神の躍動無しとし、宗教意識と政治意識とを混同することによつて、イエスの真理を歪曲せんとするもの出でたることは、極めて遺憾とする処である。我等は、常に飽くまでも、神の国実現運動こそ、イエスの福音と信じ、この信念を基調とする社会的基督教の建設、無限の営利欲を動機とする資本主義の階級社会を止揚し、搾取なき共同社会の建設、更に理想的共同社会の建設を不可能ならしむる不公平なる国内的及び国際的諸関係を改造し以て戦争の原因を除去し、恒久的世界平和の実現を期して進み來つたのであるが、彼等は我等の立場を「ブルジョア宗教の日和見主義、小ブルジョアの小市民的態度、社会民主主義的態度」なりと排撃し、自らこそは、革命的SCMと称し、飽く迄も戦闘的、階級的立場に立ち、教会、青年会を悉く否定し、その実践に於て、反宗教運動と何等異なるを見ざるに至つた。しかも我等の勧告に対して反省する処なく、その傾向は東山莊における第四二回夏季学校を経て、いよいよ露骨に、いよいよ明白になるに及んだ。従つて、全く立場を異にする我等はむしろこの際、断然、日本SCM研究会を解消せんことを本日の大会において提議し、主張したるに拘わらず、遂に多数決をもつて之を拒否したるが故に、我等はここに日本SCM研究会を脱退し、爾今、之と何ら関係なきものなることを声明す。⁽⁹³⁾

この声明書には、もとより、中央委員ではなかった中島の名はない。しかし彼もまた、いち早く七月一八日付で、SCM中央執行委員長の藤田逸男に宛てて、運動の急転に対する自己の責任を痛感して、SCM京都支部長の辞表、及び建議書を提出している。その辞表と建議書の文面は、次の通りである。

辞表

最近京都支部員中コミュニunistと行動を共にする者あり。結果SCM全体に迷惑を相かけ候同支部長たる小生の不行届の致す処にて恐縮至極に存じ候小生の力にては到底統制不可能につき、此際引責辞任致し度く此段御承認御願候也。

建議書

SCMの将来に関し、小生の卑見左如くに御座候間参考迄に御聞き取り願上候

一 左翼張りの組織、機関名、用語等の大半を此際一掃し、宗教運動らしき組織、機関名、用語等々を用ふること、
二 匿名、潜航戦術、ピラ撒き、秘密主義等一切を止め、公然、堂々と宗教運動として闘ふこと、三 何処迄も社会的基督教の宗教運動として進み、実践規定は、ファツシズム排撃、コミュニズム批判の条件を以て発展さすこと。⁹⁴

かくして中島もまた、SCM内部における階級闘争を志向する動きを峻拒して、その批判にさらされていったのであったが、この時の彼の心痛と苦衷は察するに余りある。もとより、こうした事態の急激な変化をめぐって、学生た

ちの協調性を欠いたセクト主義や独善性を指摘することは易しい。けれども、彼らの運動を支える組織的な基盤のよろさや理論上の未熟さが指摘される以上に問われなければならないのは、むしろ、この時期の日本のキリスト教の保身的な体質の方であろう。この事件をめぐる、杉山顕治が、当時の教界の指導者たちが、「それらの学生たちを導いて行かふといふ気持ちよりも、反逆者として、常に冷酷な取扱いをした」と指摘して、それが、「かえつて彼らを、そのようなところに追いこんでしまった一つの原因であつた」と述べていることは、教育者としての彼なりの学生たちに対する擁護の声でもあつただらう。⁽⁹⁶⁾

とは言え、学生キリスト者たちの主張が、過度に理念先行の性格が強いものであつて、当時の民衆の具体的な生活の実相に掉さすものではなかつたことは、やはり、運動の限界として指摘されなければならない。それは、運動がエスカレートしてゆく過程においてのみならず、分派的な路線対立の中で、相互に応戦し合つた議論の論理の組み立てのあり方を見ても言えることであつて、その戦闘的な主張や鋭利な教会批判の言動にもかかわらず、そうした主張が、民衆のエートスに根ざした現状変革の展望を切り拓いてゆこうとする姿勢を、一向に感じ取ることができないことも示されている。こうした運動の観念的な性格は、「学生」といつた、実社会との具体的な接点が希薄なモラトリアム世代が、ともすれば陥りやすい陥穽ではあつたが、そのようなエリート意識を抱えた立場から、いくら自己完結した思弁的な理論を振りかざして、自分たちがプロレタリアートの側に立つと訴えても、いずれ運動が行き詰まつて、集団分離化が始まつてゆくのは、時間の問題であつたのかもしれない。そして結局、分裂したSCMは、残存したグループが革反同盟を新たに結成して、更生SCMとして名古屋を拠点にして活動を進めようとしたものの、三二年一月頃には消滅し、さらに、この更生SCMを批判する形で基督教前衛同盟が新たに結成されたが、これもほどなくして姿を消してしまふのであつた。⁽⁹⁷⁾

むずびにかえて

かくしてSCMは、短期間のうちに瓦解していったのであるが、そのような結果に至った要因がどのようなものであったかについては、その後、さまざまな評価がなされている。⁽⁸⁸⁾たとえば、運動の渦中であって、その顛末を経験した中原賢次は、次のような苦渋に満ちた総括をしている。

SCMの組織は社会的危機の増大と共に急激に伸展し、その信仰はパン種のようにふくれ上った。(中略)しかし、SCMの激流はいたる処で障害にぶつかつた。排撃され誹謗された。不幸にも味方であるべきキリスト教界において、特に排斥は強く犠牲も多かつた。それによつてSCM前衛は既成教会にぶつかり、そのため若きエネルギーは社会問題に方向を集中し、その実践者は新たな激しい理論でなければ満足できなくなつた。そして信仰とその実践の正常な理論的裏づけも方向づけも、圧倒的に迫り来る危機感の前には急速に大衆運動の前衛から批判されはじめた。(中略)日本基督教青年会同盟の指導と庇護のもとに育まれたSCMは、全国にわたる男女キリスト者学生・青年を一つの組織体にまとめて、自力で推進する体制を整えるまでに成長しながら、もろくも崩れおちた。培い育てあげた指導者、棘の道を切り開いて協力して来た先輩たちの指導・理論を乗り越えようとする次代勢力の自己過大評価の悲劇であつたと解するよりも、内外諸情勢の緊迫感・危機感が、熱心未熟な若人たちに強力に迫つて来たこと、教会内の反SCM勢力に排撃されそれに対する抵抗として、彼らはもはや穏和な漸進的歩調にたえられなくなつて、一切のくびきをふり切つて独走を欲したことによる自己分裂と見るべきであろう(傍点引用者)。⁽⁸⁹⁾

加えて中原は、「ヒロイズムと見なすよりは、狂信的にもっと効果的な実践的闘争を欲することによって、SCM自体を反動的役割として排斥せざるを得なかった若いメンバーには、キリスト教に抛りつつも、新しきキリスト教的指導・訓練をもつ期間が短かったことに、SCMの急激な伸長の弱点が大きく影響した」とも述べている。けれども、それではこの「新しきキリスト教的指導・訓練」とはどのようなものであったのか。それが、SCM崩壊後に残された中島ら指導者たちが背負ってゆかなければならなかった課題だったのではなからうか。それを、当時の学生たちに求めるのは酷であり、むしろ問われなければならないのは、その当時の日本の教会がもっていた護教的な体質であり、神学アカデミズムのありようだったのではないかと思われる^⑩。

学生キリスト教 (SCM) は、一九二〇年代末から三〇年代初頭にかけての日本のファシズムの台頭に危機感を抱いた青年キリスト者たちによる教会変革運動であった。けれども、この運動に対する日本の教会側の対応は、押しなべて無理解なものであった。当時の各教派の機関紙を通覧しても、SCMについてはほとんど報じられてはいない。その中でも例外的に『基督教世界』は、「SCM事件」と題する論説を掲げて、次のようなコメントを記している。

基督教青年会の夏季学校が生んだSCM (基督教学生運動 Student Christian Movement) が赤化し特高課が検挙の手入れをしたといふことが朝日新聞によつて可成り大袈裟に報ぜられ、教界内外に多大の衝動を与へた。記者に於て調査せる処によればSCMそのものが赤化したのでなく、SCM陣営内にあつて極左の誘惑にかゝたもので、マルキシズムとキリスト教とを協調出来るかに尙惑され、小児病的にフラ〜といった少数分子であつた事が明白になつた。寧ろ東京本部に於ける研究などは危機神学を研究するといった純然たる宗教的研究であつた (傍点引用者)。

では、この記事の論者はSCMの将来について、どのような展望を持っているのであろうか。それについては、「恐らく是れを動機として極左に傾いたものを清算してSCMは飽くまで宗教運動としての立場に於て社会的基督教の本領を發揮するやうに進むであらう」との見通しを述べた上で、この問題に対する日本のキリスト教界の責任について、次のように問いかけている。

翻つてSCMのうちから少数者なりとも極端な階級闘争の渦中に巻き込まれる者があつたことはSCMの産婆役であつた基督教青年会の幹部諸氏並に当該学生の母校教授諸氏に責任なしといふことを得まいが、同時に基督教全体にも責任があると思ふ。青年に対する指導能力を欠き乍ら徒らに彼等を種種部落的扱ひ否排撃的態度にさへ出でた者があつて益々或る者等をして矯激な分子に転落せしめたといふ事実がある。教会自身も反省する要あるを思ふ。⁽⁹⁾

文面における守勢的な姿勢は否むべくもない。しかし、SCMを「赤化したキリスト教」として排斥していった多くの教会の人たちに対して、学生たちの行動の意味を理解し、擁護しようとしている姿勢は評価できよう。少なくともこの論者は、SCMが問いかけた問題を葬り去ってしまうのではなく、日本のキリスト教全体が受け止めるべき重要な課題であると訴えたのである。⁽¹⁰⁾ それならば、この論者が期待している「SCMは飽くまで宗教運動としての立場に於て社会的基督教の本領を發揮」するには、どうしたらよいのであろうか。中島は、その課題を探究してゆく必要を覚えたのではなからうか。

先述したように、中島らを中心に於て社会的基督教徒関西連盟が結成されたのは、一九三二年九月のことであつた。SCMの瓦解は、中島にとつても、その指導的な役割を演じていただけに、痛恨の出来事であつたに違いない。しかし、

彼のキリスト教の変革に対する素志は、SCM崩壊後も萎えることはなかった。関西連盟が結成された同月二四日には、同盟の第四一回夏季学校に参加した関西の学生キリスト者たちによって、ただちに「日本SCM阪神支部」が結成され、翌年には神戸で、そこから独立して「日本SCM研究会阪神支部」が設立され、そこには、神戸高商、関西学院、神戸女学院、広島女専などの各青年会のメンバーが属していた。そして中島は、翌三二年五月には、自分の同志たちとともに、関西連盟の機関誌である『社会的基督教』を創刊したのであった。

最後に、一九三三年五月に神戸基督教青年会の機関紙『神戸青年』の巻頭文として掲げられた中島の文章を引用して、むすびにかえたい。宗教的リベラリストとしての彼の悲壮な覚悟のようなものが読み取れよう。

自由主義は資本主義文化とともに滅ぶべきものであらうか。(中略) 今や世を挙げて滔、或はファシズムに雷同し、或はコンミュニズムに走り、或はソチアル・デモクラチーを云つてすべて自由の本義を没却せんとするに際して、自由の真意義に徹して、之を保存擁護せんとするは、基督教徒を措いて外にない。而もそれは個人主義と自由競争主義のイデオロギーに囚われたる旧信仰の人々の堪へ得る所に非ずして、新しき信仰に立つ吾人社会的基督教徒の任務であらねばならぬ。(傍点引用者)^(四)

(追記) 本稿の執筆にあたっては、資料の提供などで真嶋克成、坂本庸秀(神戸YMCA)、濱口妙子(日本YMCA同盟)、池田裕子(関西学院院史編纂室)の各氏のお世話になった。この場を借りて感謝したい。

- (57) この委員会の設置の当初の目的は、学生層に対する「思想善導」が主眼であった様子である。同盟は、一九二九年七月一日に開かれた第二七回同盟委員会における協議事項の中で「学生運動振興に関する件」が取り上げられて、この思想問題調査委員会の設置が決まり、学生たちの思想の現状を調査することになったが、その主な目的は、当時の学生層が抱えている教会に対する不満や、社会主義思想への傾倒の実態を把握して、彼らが階級闘争に参加してゆくことを防御しようとするものであった。
- (58) 前出、中原『基督者学生運動史』二五—二六頁。
- (59) (60) 中島「基督教の社会的立場とその使命」(『開拓者』第二五卷九号、一九三〇年九月一日)二七頁。これ以降、中島は、相次いで同盟の機関誌の『開拓者』に論文を寄せてゆき、それらの文章は加筆されて、翌三一年七月に『社会的基督教と新しき神の体験』として出版された。この書物の中で中島は、自分が提唱してきた「社会的キリスト教」の内容を体系的に論じているが、彼の主張は、同書の巻頭言に掲げられている「贖罪愛能動の立場より神を体験せよ。然らば社会的基督教の神即ちイエス・キリストの神が体験出来るであらう」といったスローガンや、「序」における「神を社会的に共同社会の体験を通して新に体験し直してその立場より従来の基督教の主要なる教理に新なる解釈を下して、一つの体系にしたもの」といった体験主義の信仰理解に基づくものであった、なお、「社会的基督教」という呼称が『開拓者』に登場したのは、同誌に中島が寄稿した「社会的基督教と神の体験」(同誌、第二五卷一—号、一九三〇年一月号)が最初であった。
- (61) この第四〇回夏季学校に出席した関西学院の一学生は、その時に受けた強烈な印象を、次のように報告している。「(前略)正に一九三〇年こそ、日本の国の歴史の上に一つの時期を永久に彫るべき時であり、新しい時代の先駆でなければならぬ。我々青年会は過去に於て、明治日本の文化史上に幾多の貢献をなし、巨大なる足跡を印して来た。だが其れは過去に於ける貢献の事実であつて、現代に於て、其れが為にこそ我等は其の功名の牙城に閉じこもる理由はないのである。否むしろ更に進んでかつて巨大なる足跡を残した如く、未来の歴史に頁の上に我等は有意義なる記録を残さねばならぬ。(後略)」(『関西学院学生会宗教部記録』一九三〇年、引用は井田昭子「中島重と関西学院—SCMと社会的キリスト教運動をめぐって」『キリスト教主義教育』第一八号、関西学院キリスト教主義教育研究室、一九九〇年一月、三二頁)。
- (62) 木本茂三郎『昭和の東京YMCA』(東京キリスト教青年会、一九六六年)一七一—一八頁。

- (63) 日本基督教青年会同盟編『基督教青年会創立五十週年記念大会記録』(日本基督教青年会同盟、一九三〇年二月) 三六頁。
- (64) 同書、五七頁。この中で奥田龍三が次のように主張していることは、この協議会の方向性を示すものであろう。「単なる研究は理論だけで、決して足が地についていない。単に理論を取扱うのみでなくして、實際問題に手をつけなければならぬ。青年会は何かの満足なる社会運動に足をつこんで欲しい。もしも思想問題を思想としてのみ論じて、その間に實際運動がなければ机上の空論である(後略)。
- (65) 一例をあげれば、一九三〇年一月三日に神戸基督教青年会館で「新興キリスト教講演会」が開催されたが、同演説会の講師には中島重(キリスト教の中心眼目たる神の国に就て)と菅円吉(キリスト教の新しき転向について)が迎えられて、参加者は百数十名といった盛況であった。この講演会に参加した浦井安太郎らは、その主張に賛同して、その後、SCM阪神支部の一般部に加えるなどして運動員になった。このSCM阪神支部は、一旦解散して、一九三二年九月一日に神戸社会的基督教徒関西連盟を結成し、同連盟は、一九三三年五月に社会的基督教徒関西連盟に合併されることになった(『社会的基督教の時代(1)』『神戸YMCAの歴史を語る』第二分冊、神戸YMCA一〇〇年史編纂室、一九八一年六月、二五頁)。
- (66) 一九三〇年七月に開催された同盟の第四〇回夏季学校で「研究会設置」に向けて決議された「声明文」に対して、日本の教会の中から少なからぬ批判が起り、『基督教世界』の紙面で論戦がなされている。たとえば、芹野与太郎は、学生たちは神と個人との関係において多くの賜物をもっているようであるが、兄弟愛を知っていないと皮肉り、菅原菊三は、人格主義に立つ神学を人間中心主義であると批判している。この間の経緯については、茂義樹「一九三〇年代のキリスト教ジャーナリズム―『基督教世界』の場合」(本誌、第二五号、一九七六年二月)が取り上げている(同誌、五九一―六二頁)。ただし、茂氏は「社会的キリスト教」を「社会的福音主義」(Social Gospel Movement)として理解しているが、両者は同じものではない。
- (67) 中島『マルキシズムに対する宗教の立場』(新生堂、一九三〇年) 三頁。この著作をめぐって中島は、「此書物は主として学問的批判的なもの」であり、「機能主義的社会哲学の立場から既成宗教とマルキシズムとの両者に対して批判的論評をして居る」と述べている。彼は、既成の宗教に対しては「蟬脱更生」を要求し、マルキシズムに対しては「より科学的」、「より学問的」を要求しているという。その際に彼が強調していることは「宗教的体験」であって、「宗教哲学」は宗教生活にとつては機能的なものであって、宗教生活に「正しい発達の方向」を指示するものに過ぎないと説明している(同書、一一二頁)。
- (68) 同書、七頁。
- (69) 同書、一五一―一七頁。中島は、「マルキシズムに対する宗教の立場からの批判は先づ宗教の立場それ自身の自己反省から

始まらねばならぬ」と述べた上で、「宗教自体が従来の通りで、資本主義的であつたり或は甚だしきは中世紀的封建的であつたのでは宗教こそ批判の俎上のものであれ決してマルキシズムを批判し得るものではない。故に宗教の立場からマルキシズムの批判を行為さんとする人は此点を十分考慮に置いて進まれんことを希望する」(同書、一四九頁)と主張している。

(70) 同書、一五三頁。しかし、中島は他方で、「マルクスを批判することはその真理を発揚してその誤謬や誇張や歪曲を捨てて、人類の文化のうちにマルクスを真に活きるものとする所以である」と述べて、マルクスを真に人類の文化のうちに活かそうとするのであれば、もつと冷静、かつ実験的、科学的に批判して、「マルクスの真理を活かし乍らマルクス以上の社会科学乃至社会哲学を作り出すだけの気魂と態度がなくてはならぬ」とも述べている(同書、二〇七頁)。

(71) 同書、一五四―一五五頁。

(72) 同書、三二頁。

(73) この書物の中で中島は、サン・シモンに始まる「社会的キリスト教」の思想的系譜について略述した上で、賀川豊彦の働きについても触れて、「我国に於ける賀川豊彦氏の宗教運動は社会的基督教としては恐らく、以上の何れよりも進歩したものといつてもよいものであろう」と高く評価している。

(74) 同書、一一五―一六頁。

(75) 同書、一一九―一二二頁。中島は「神の国」の内容について、次のように要約している。「基督教の中心眼目は社会を建設せんとするに在る。宇宙の根本生命であり、人類の父である神を信ずることに依りて人類が互に同胞兄弟であることを自覚し、之に依りて此の社会を建設せんことを眼目とするものである」(同書、一二五頁)。

(76) 当時、関西のSCMに関わっていた涌井安太郎氏は、その頃の教会の青年たちは、管円吉の『基督教YMCAの転向とその原理』、『基督教社会化の理論』とともに、中島の『社会的基督教と新しき神の体験』がバイブル的な役割を果たしていたと回顧している(『神戸YMCAの歴史を語る(座談会編)』上巻、復刻版、財団法人神戸YMCA、二〇〇八年、一四三頁)。

(77) 前出、中原賢次『基督者学生運動史』一六七頁。

(78) この日本SCM研究会は、社会的キリスト教を普及する目的で、以下の小冊子を「SCMパンフレット」として出版している(いずれも、基督教学生運動出版部刊)。第一輯 宮岡達也『預言者の宗教(ラウセンブッシュに依る)』、第二輯 寛光顕『現代人と神の問題』、第三輯 寛光顕『社会的基督教の史的発展』、第四輯 石黒巖『基督教の絶対性と歴史的思想』、

- 第五輯 寛光頭『歴史のイエスと躍動的生命の基督教』、第六輯 福田逸史『唯内面的基督教の排撃』
- (79) 前出、奈良『日本YMCA史』二八三頁。
- (80) 「教会内部の思想問題座談会」(「開拓者」第二六卷第七号、一九三一年七月)三五―三七頁。なお、日本基督教会の機関紙『福音新報』も、この座談会の記録を転載している(同紙、第一八六九号、一九三一年七月九日)。
- (81) 後に中原賢次氏は、当時の日本のキリスト教界の体質について、次のように回顧している。「各種の会議では、キリスト教界の重鎮である神学者・牧師・教会役員代表のみが教会問題について審議し、美辞麗句を連ねた宣言や声明等の決議文を作成し、参加者の前で厳肅に発表し、満場の拍手、喝采と賞賛の辞が寄せられただけであり、それに基く実践活動は何もなされなかつたのである(傍点引用者)」(中原『SCMは何であったか―昭和初期の基督教者学生運動論考』(私家版、一九八二年、八頁)。
- (82) 前出、中原賢次『基督教者学生運動史』一六七頁。
- (83) この時に発起人代表として岩間松太郎(雲内教会牧師)が述べた開催に当たっての主旨説明は、次のようであった。「今夏七月来、御殿場東山荘における日本基督教青年会同盟夏季学校に参加したる学生以外の者等数十名は、基督教者学生運動(SCM)各員の真剣なる態度に又その正しい指導精神に満腔の賛意を表し、これに対する世の誤解をとき、進んでこれが正しき宗教運動としての発展を遂げしめん為に、微力を至さんと既に宣言せし所なり、されど我らはこれに止まらず、進んで広く全国の同信仰者を糾合して目下の窮迫せる社会情勢に対しキリスト者としての積極的進出をせんとて先ず組織と協力とを持つ為めに今日の会合を持つた次第である」(前掲、中原『基督教者学生運動史』一六七―一六八頁)。
- (84) 前出、佐藤健男「日本に於ける社会的基督教の発展」一三頁。
- (85) 前出、中原『基督教者学生運動史』一六八頁。
- (86) この東西両団体は、一九三三年八月二〇、二一日に開催された関西連盟の第三回大会において合同されて、社会的基督教全国連盟として再編された。
- (87) 前出、奈良『日本YMCA史』二八四頁。こうした論客の著述は、いずれも基督教者学生運動出版部の名で同盟出版部から刊行されている。それらを列記すると、次の通りである。菅田吉『基督教の転向とその原理』(一九三〇年)、吾妻東一『基督教と資本主義』(一九三〇) 中島重『社会的基督教と新しき神の体験』(一九三一年)、杉山謙治『日本学生思想運動史』(一九三二)、菅田吉『基督教社会化の理論』(一九三二年)。この中でも、特に菅や中島の著作は、各教会の青年会の研究会でテキストとして広く読まれていたという。

(88) 西村は、一月三日に釈放され、翌三二年に学校休暇中に学生監に呼び出されて同志社を退学して、その後、関東学院神学部にて転校入学を許されて、同校のSCMのメンバーとなった。西川の同志社自治会活動については、前出『同志社学生キリスト教運動史』の中に、彼に対するインタビューに基づいた記述がある(同書、六四一―六五頁)。

(89) 一九三二年一月一日に同盟の中央執行委員会の教育委員会は、同盟の全組織に向けて「SCMにおける組織と個人」という文書を送達して、事態に対応した。ここでは、SCMを「新興キリスト教」として評価しつつも、「SCMは永久的に宗教運動であるから、今後も、政治・社会上のSCMとしての理論を建てることは適当でない。(中略)而してこれらの運動に加入するのは、今日まで通り(阪神支部としては、各個人の信仰により又境遇によって決定すべきと理解する)とか、「SCMの組織員としてその進退については、支部又は本部と当然連絡了解のあるべき筈」といった文言が並んでいる(前出、中原『基督者学生運動史』二〇二―二〇三頁)。

(90) この時期に関西学院の神学生としてSCMのオルグ活動に参加していた中森幾之進は、戦後になって、当時の自分の心境を次のように振り返っている。「(前略)わたしの関心はSCM運動に重心を移していた。マルクス、エンゲルス、レーニンの著書をテキストにして読書会が続いていた。宗教的なものは、菅田吉、中島重、寛光頭らの著書の研究会を並行して進め、聖書を読み祈ることも忘れなかった。しかしこんな観念的な研究行為が長く続くはずはない。SCM運動そのものの動機がキリスト者の社会的実践にあったからだ。プロレタリアートの側に立ち、その歴史的使命を達成することに貢献しようとするれば、必然的にその実践は階級闘争に連ならざるにはおられない。そこで熱心な同志ほど、現在のような教会を対象とした理論闘争やピラマキなどで満足できなくなってきた。(中略)そのころから関西の同志の間に現在のSCMの指導者に依拠してはならぬ、社会悪の現実にも立ち向かい、被圧追階級解放の実践の中でしかイエスは答えられないのだと判断して、指導者が大学教授や既成教会牧師として体制側にとどまるかぎり、彼らを信用するのは危険だとの姿勢がだんだんと打ち出されてきた」(中森『下へのほろ歌』日本基督教団出版局、一九七三年、一〇八一―一〇九頁)。

(91) 『第四十二回夏季学校を閉校するに当つて』(日本YMCA同盟資料室所蔵資料)。引用は、『福音新報』第一九二三号、一九三二年八月四日。

(92) こうした事態に直面して、同盟の総主事であった寛光頭、主都主事の松沢光茂、そして学生部主事の中原賢次は、一九三二年一月五日をもって引責辞任している。

(93) 田中左右吉「教界展望」(『社会的基督教』第一巻第四号、一九三二年八月)一二頁。

(94) 前出、中原『基督者学生運動史』二五九頁。

(95) 当時の関西学院の学内におけるSCMの様子をめぐって久山庸氏は、次のように振り返っている。「(前略) この運動はもちろん東京方面の学生の間で最も盛だったのでしようが、関西でも盛で、平素穏健をもつて聞こえている関西学院でも、中島さんの始められたバイブル・クラスが盛になり、それまでの讚美歌やキャンブ・ソングの練習を中心にしていたようなキリスト教の集會が、それによって圧倒されるようになって行ったそうです。(中略) しかも学生は中島さんを置いてきぼりにして左傾し、学内にはアジビラが盛にはられたということです。プチブル的キリスト教の微温性を糾弾して、きみらは温床で何をしているのか、われらの同志はバター箱で臭い飯を食っているではないかといったような文字を斜めに書いたようなビラが、夜のうちに掲示板は勿論のこと、中央講堂の院長の坐る椅子にまではられていたそうです」(近代日本とキリスト教―大正・昭和篇―基督教徒兄弟団、創文社、一九五六年、二八七頁)。

(96) 「夏季学校事件座談会」(『開拓者』第二七卷第一〇号、一九三三年一〇月、前出、奈良『日本YMCA史』二八六頁)。しかし、SCMに対する学校側の対応はそうではなかった。それぞれの学校当局は、文部省の情報提供の要請にも応じて、彼らは「要注意」の存在であるとみなした。たとえば関西学院では、一九三〇年五月二四日に曾木副院長と志賀勝文学部教授が「兵庫県庁警察部」を訪れて、「学生取調べノ際ハ、ソノ人名、時日、出来得レバ事件ノ内容ニツイテ学校ニモ知ラセレ度キコトヲ」依頼しているし(前出、井田昭子「中島重と関西学院」三三三頁)、同志社大学学生監の絹笠佐一郎は一九三二年六月一六日付で、文部省学生部長宛に「思想問題資料蒐集ニ関スル件」について回答して協力している(『同志社百年史(資料篇二)』学校法人同志社、一九七九年、一六七―一六七三頁)。

(97) 以下に引用する前衛同盟の結成に関する声明案の文章は、SCM解体を前にしての最後の呼びであったとも言えよう。「今や、社会的基督教は全く四分五裂の状態であるが、その影響は深く既成宗団内に浸透し、進歩的なる教派は進んで社会的基督教に関心を持つてあると共に、他方に於て反動神学はフアシヨ的形態を持つて新しき宗教運動を圧殺せんとしている。社会的基督教の名を冠せる改良基督教の更に著しきものあるとき我等は立つてここに基督教前衛同盟を結成し、真にSCMの正しき伝統を継承して階級的立場を厳守し、イエスの福音を証すると共に我等の実践に於て栄光を神に帰せんことを誓ふものである」(『基督教前衛同盟結成に関する声明案草案』一九三二年一月七日、日本YMCA同盟資料室所蔵資料)。

(98) 前出、中原『基督教者学生運動史』四―五頁。

(99) たとえば、戦後になって北森嘉蔵氏は、SCMが既成組織に対する否定媒介性に運動の特徴があったとして、「いちおう自己にとつて否定的である『組織』をあえて自己の否定的媒介とすべきではなかったらうか」と指摘して、「そのとき始

めて、(中略)『白虎隊』的な純粋性、すなわち否定によつて媒介されない直接的な純粋性から脱却して、否定媒介的な純粋性へと具体化され、かくして歴史形成的なものとなり得たのではなからうか」と述べている(北森「学生キリスト教運動(SCM)の歴史を回顧して」同『日本のキリスト教』国際日本研究所、一九六六年、所収、二〇六頁)。いかにも北森氏らしい思弁的で、弁証法的な理解の仕方であろう。

⑩ 小倉襄二氏は、この時期の日本のキリスト教界をめぐつて、次のように厳しく批判している。「社会的基督教(SCM)の運動などを非福音的であるとして一面的に弾き出し、コミュニズムを単純に唯物論、無神論に立つ迷妄として批判することによつて、自ら提出した社会問題からも目をそむけた教会には、社会科学―左翼の処分の指示する侵略戦争に対する認識は存在せず、天皇制の擬似宗教化と無法な統制弾圧には心をいためながらも、反共をスローガンに進撃する軍国主義者に対しては、少数の人々をのぞいて抵抗する原理も力量もなかったと考えざるを得ない」(小倉「キリスト教社会事業の論理―厚生事業体制と『抵抗』の問題」同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究Ⅱ―キリスト者・自由主義者の場合』みすず書房、一九六九年、一二二頁)。

⑪ 「SCM事件」(『基督教世界』第二五二六号、一九三二年七月七日)一頁。文面に「特種部落的」という差別的な表現が含まれているが、資料的な性格を有するものとして、そのまま引用した。ご理解いただきたい。

⑫ SCMは、地方の教会にも少なからぬ影響を及ぼした。たとえば群馬県の安中教会牧師の柏木義円は、SCMについて次のように述べている。「前略」近來社会的基督教が高調され、SCM運動とか申すものが起り、地方の教会にても青年が此運動に共鳴して、教会を離れ候ものも有之やに聞き及び候。併し吾人は、個人的とか社会的とか申すことに依り、主一信仰一の基督教者が相分相争ふなどは、一向何の意義か不相分候。元來基督教の救ひは、神と我との關係にて、固とより個人的のものにて候。(中略)社会組織が如何に理想的に完成し、万人の生活が如何に安定致候ても、我と神との關係にして不相調候はゞ、基督教の救済はゼロにて候(傍点引用者)。また、彼は次のように続ける。「去り乍ら、既に我と神との關係にして正しく候はゞ、全人類を而かも一人々々を愛して止まざる神の聖意を躰するものにして、己れ一人救はれて安心を得たりとて冷然独善他を顧みず、他の救済は我れ不闕焉で居らる可き筈のては無之、つまり、個人的救済は自然社会的と相成るは必然の事と存候」(傍点引用者)。柏木によれば、「教会の本色たる救霊運動と、社会事業若くは社会運動との區別を明らかにして、混同不致が賢明」であるというのである(柏木「個人的救済と社会的救済」『上毛教界月報』第一四〇八号、一九三二年一月二〇日、一頁)。しかし彼は、「教会の本色たる救霊運動」と「社会事業及び社会運動」の區別の中身や、あるいは連続性と非連続性については、具体的には何も語っていない。柏木にとつて「神の救済」とは、先

(103)

ず持つて「個人的なもの」であつて、社会本位のものとはならなかつたのであろう。
引用は前出、武邦保『昭和初期』における神戸YMCA（『神戸とYMCA百年』所収）より再引（同書、二四八頁）。